

オランダ農業 視察ツアー訪問記

今年6月におこなわれたオランダ農業の視察ツアー。オランダを合わせ鏡にして見えてきたものは何か？視察ツアー参加者からの寄稿をお届けする。

第1回 今後の人生の考え方と方向性を見出すことができた。

文／金野 徹



金野 徹

こんの・とおる／岩手県八幡平市
1989年生。2012年3月 帯広畜産大学 食料資源ビジネスユニット卒業。学生時代、酪農、畜産、畑作と10数件の農家さんを取り、農家バイトを体験、今春より就農に向け農業研修中。
畑4a、水田1.2ha、山林17ha。

全国高校野球選手権大会の某地方大会決勝、「疑惑のホームラン」があった。打者によって打たれたボールは、3塁側のホームランボールの左を飛んでいく。しかし、判定はホームラン。打たれた守備側の選手は、当然抗議した。それを半身片手で「ハイハイ」とあしらう主審。この時代なのにビデオ判定もしなければ、中継するテレビ局もVTRを流そうとしない。その後おとなしく審判の判定に従い、試合を再開する選手たちを、「美しきスポーツマンシップ」の姿として捉えるかのような実況、解説。その美しい姿に、拍手でも起こりそうな球場の雰囲気。

ここに、「4者」の存在がある事を確認しておく。ピュアで、「常識」を疑う余地を与えられる事すら無く、組織に従う球児。疑われる事を嫌い、自らを正当化する審判。地元の人々を過剰なまでに保護・美化する、地方のメディア。そして、流れて来た情報を鵜呑みにする傍観者。一体、戦時中の戦争教育と何が違うのだろうか。残念ながらこれは、現在2012年に起こっている事であり、野球ばかりでなく、高校教育、農業・農村問題と、いろいろなストラクチャーの中で、この「4者」が存在する。さらに、状況をこじらせるのは、各々が正しいと思って疑わないところにある。

ツアーで感じた事

結局、5対3で負けたチームは、その疑惑の3ランホームランが無ければ自分たちが甲子園に行けたのだ。それでも、「正々堂々戦ったので悔いは無い」などと言うのは、「日本の食料を守っているんだから仕方ない」と嘆くのに似ている…。

ずっと、この「農業経営者」のよ

うな本を待っていた。今まで農業は、どうしても暗い産業だとしか考える事が出来なかった。聞こえてくる情報をバカ正直に信じていたのだ。大学の研究調査で農家、農協、政府に話を聞いても、論文雑誌を読んでも、世界の終わりのような雰囲気である。そこで、去年の冬に論文検索サイト「CZ」で偶然にも「農業経営者」の存在を知り、購読してみると革命的な雑誌だと感じ、自分がこのツアーに参加したらのなら、どんな考え方に変わるだろうかということに興味があった。

業の現場が、いかにして儲ける事が出来るかに注力していると強く感じた。日本であれば、いかにして農家に種苗・農業を買ってもらうかがポイントだろうし、大学においては、こともあるうか、研究が現場に還元される事無く、「理系」である当人の、自己顕示欲を満たすためのツールになってしまっている場合が多い。

オランダの風土を見て、水路が発達している事と、農地の一区画が一律6ha（見学先の農家周辺においては）である事に注目した。この国には土地の所有権にしがらみ人、というより、そういう文化が無いのだろうと思った。それぞれの国によって歴史はもちろん違うだろうが、国全体の最適を目指している事が垣間見えた気がする。でも日本人にだって、高速道路や商業施設誘致による開発時には、お金と引き換えに喜んで土地を転用するリアクションの早さがある事くらいは知っている。

しかし、日本でも、オランダでも、それぞれがおかれている環境（気候、土地、政策、問題等）の中で出し切っている生産技術の度合いは変わらな

第1回 今後の人生の考え方と方向性を見出すことができた。

照時間も圧倒的に長く、涼しい。加えてもちろん、その環境を強みに出来る作物をオランダ人は知っている。そこで日本の「農業関係者問題」の存在をさらに大きく感じた。このツアーでは、オランダの「農業関係者問題」の存在は、確認できなかった。オランダのみならず、海外の農業経営者は、今どのような問題と戦っているのだろうか気になる。

この疑問を含め、真理迫る質問がでなかったのには悔いが残る。自分が聞きたい質問を他の人が必ずしも聞いてくれるわけではないし、技術や、政策などはある程度調べれば出てくるのだから、どうせなら、そこに行かなければ聞けない事を、相手の話を割ってでも聞くべきであった。また、オランダの農業に、疑問や感想を持つためにも、その国の知識をもっと深めてから行く必要はあったと思う。

感謝の気持ち

一緒にツアーに同行した方々との関わり合いも貴重な時間で、むしろ、それが自分には必要だったという事がよく分かった。農業に関わる素晴らしい方々が自分の国にもたくさんいる事がこのツアーを通して分かった。それだけでなく、こんな丸腰の人間を「若者、よく来た！」と歓迎

してくださり、ツアー中もとてもお世話になった。まさか会社の重役を担う方々の話を聞けるとは思っていなかった。今も頭が重いような気がする。当然かもしれないが、数十年激動の日々を送られて来た方々の言葉は、これから人生経験していく中でやっとなら理解できる事なのだろうと思う。でも、この年で体験できた事は、何ものにも代え難い。特に、あの方のこの考えがすごかったというネタは、ツアーに行った者の特権としていじわるにも黙秘させていた。

また、昆さんには、本誌8月号コラムにて私への手紙を綴っていた。き、感無量の思いである。しかし、照れ隠しのために言わせていたのだと、そのコラムは私のような次世代の若者にも発せられた言葉だと思っている。バブルを経験しておらず、不況の時代しか知らない平成生まれの我々にも、昆さんの思いは絶対に届いているはずである。昆さんはじめ、今回ツアーでお世話になった方々に心から、感謝の気持ちを伝えたい。

心の変化

このツアーに参加した方々にお会いし、お話を聞かせていただくことで、意外と自分の考えてた問題や、メディアが伝える問題が、実は私個

人にとっては問題ではないと考えるようになった。これまで、私も例の高校球児と一緒に、本当にピュアだったと思う。正しい事は当然のよう信じていた。しかし、当事者に有利な世の中、扱いやすい人間を作り出すために語られた正論があるという事は知らなかったし、正誤の判断だけでは、その裏の本質は見えてこない。私は、このツアーに参加した事により、今までの考え方から一気に抜け出す事が出来たと考える。よく耳にする農業問題や、自分が見ているこの農村の現状を見つめ続けているは、オランダがもっているようなビジネスセンスは絶対に手に入らない！と思ったし、ちょっと見過ぎたと思う。もしかすると、私は一生かかってもずっと変わらないままでいたかもしれない。

その昔、先祖が故郷を離れ、開拓してきたであろうこの農村であれば、先祖代々守って来た土地だからと、守り続ける必要は無いと思う。誰もが、開拓しに故郷を捨て、挑戦していい権利があるはずである。ポーランド人だって、貧しい今の環境を打破しようと、自分の国を離れ、オランダの農場に働きに出ているのである。それでもなお、人口減少率が著しい廃れ行く農村を守ろうとするのは勝手だが、国民が払ってくれ

た税金を補助金や、地方交付税で食いつないでいく地方なら、国には文句ひとつ言えないし、国のお荷物である。私は、そうはなりたくないと思う。情報に乗せられて一喜一憂するのはもうやめようと思う。また、「何をやっていいのかな」ではなく「何をやって面白いか」について考える事にした。もしかしたら、やるべきは農業じゃないのかもしれない。

学生時代、酪農、畜産、畑作と10数件の農家さんを回り、農家バイトを体験して来た。そこで密かにしてきた質問がある。対象は、農家の奥さんだ。

「生まれ変わっても、また農家の嫁になりたい（農家に生まれたい）ですか？」

もちろん、旦那さんがいないときに内緒で聞いている。答えは、たいがい苦笑いするか、首を横に振るか、すでに聞かなくても分かる（恐ろしくて聞けない）のどれかだった。そこで、今回のツアーで回った2組のオランダの農家さんの奥さんにもぶつけてみた。

答えは、2組とも

「ぜひともまた農家の嫁になりたい！今の暮らしに満足しているし、すごく幸せ！」